

# 山びこ通信

10月号  
2005.10.7

ホームページ <http://www.kitashirakawa.jp/yama.html> 電子メール [taro@kitashirakawa.jp](mailto:taro@kitashirakawa.jp)

電話 781-3215 (山の学校) 781-3200 (幼稚園) / FAX 781-6073 (山の学校・幼稚園共通)

## 第5回 ミニミニようちえん



「ミニミニうんどうかい！」(無料)

11月5日(土) 午前10時~11時

場所 ようちえんのお庭

対象 未就園児(年齢は問いません)とそのご家族

## 第5回 やまびこクラブ



「ひねもす・ブリッジコンテスト！」(無料)

10月21日(金) 午後4時~5時30分

場所 ゆきぐみのお部屋

対象 小学生はみーんな!

\*「アスレチックようちえん  
ごっこ」は準備の都合によ  
り、予定を変更しています

## 第16回 青春ライブ授業!



「あれもこれも学んでみたい!

~知のネットワーク化~」(無料)

10月28日(金) 午後7時~8時30分

講師: 前川 裕 (山の学校ラテン語講師/京都大学文学部卒)

場所: 第3園舎 対象: 中学・高校生・保護者一般

## 第4回 ラテン語のゆうべ



「ラテン語はおもしろい」(無料)

11月11日(金)

開演: 午後8時~9時30分 講師: 山下太郎

場所: 第3園舎 対象: ラテン語に関心のある方

# 「ことば」だより

以下の作文は、6年生によって書かれたものです。「ことば高学年」(南雲先生)のクラスで夏休みの宿題として出されたものです。

## 『四季をめぐる51のプロポ』 夏・牧月(プレリアル)を読んで

Y.A.(6年生)

私が小さい頃、父と散歩をして周りの景色<sup>けしき</sup>を一緒にながめてみると、父が「緑でもいろんな緑があるでしょう。」と言いました。あらためてよく見てみると、山の緑も木々の緑もたくさんの緑があって、一言ではあらわせない事に気がきました。

父はつづけて、「光や風によって、色はかわるんだよ。」と言いました。その時、ふつうに見えている景色もよく見ると、面白く色んなちがいがあるものだと感じました。

今回、牧月(プレリアル)を読んだ時に、父との会話を思い出しました。私は、プロポの勉強はむずかしいと思っているけれど、この章は六月の緑がうつくしいところと、梅雨で変わりやすい空や天気のようなすが、私にも少しはわかりやすく書かれていました。作者のアランが田舎に引っ込んだ大切な友だちに祭に招かれたというので、どんなお祭りかと思いましたが、この季節の自然の様子がお祭りというので、びっくりしました。

又、アランが「バラ万歳。」や「雷がゴロゴロと空の端<sup>すみ</sup>から端までおしゃべりをはじめた。」とかヒキガエルのフルートとか、絵本みたいに書いているところが好きになりました。

文章の中に前奏曲という言葉が出て来るのですが、「アランはこの牧月のお祭りをオーケストラの演奏をきくように楽しんだのかなあ。」と思いました。

私はアランのようにいろいろな言葉や表現を使って季節のようすを文章に書けるのはすごいなあと感じています。そして、「とても心がきれいな人だなあ。」と思いました。

(二 五年八月)

# 読書案内 私の一冊

山の学校の講師スタッフから「私の一冊」と題して、シリーズで本の紹介をしていきます。生徒のみなさんにとって、よい読書のきっかけになればと思います。

あわせて、山の学校の生徒のみなさんから、読書感想文をお寄せください(山びこ通信に掲載されます)。本を通じてどんなことを感じているのか、講師の私たちも知りたいと思いますので、ぜひこれを機に意欲のある人は、応募してください。(字数 800 字程度、次回の「山びこ通信」に応募する場合は、11月3日までに原稿を提出してください)

## 『罪と罰』

ドストエフスキー作 / 工藤精一郎訳、新潮文庫、1987年

### 『おわりとはじまり』 南雲 泰輔

「ことば高学年」「日本語の読み書き(中学/高校)」クラス担当

何度も何度も読み返していると、その本を最初に読んだのはいつのことだったか分らなくなってくる。カバーが破れ、補修したセロテープも黄ばんできた本。そういう本が何冊かあります。

ドストエフスキー著『罪と罰』(工藤精一郎訳、新潮文庫、上巻 660 円、下巻 700 円)は、その中のひとつで、中学時代に読んだものです(これは覚えている)。手塚治虫氏によって漫画化もされており(講談社、手塚治虫漫画全集。あるいは角川文庫、手塚治虫初期傑作集に収録)、原作の分厚さに圧倒されるときにはこちらが手軽です。ドストエフスキーやトルストイに代表されるように、ロシア文学はとにかく長いですが、それだけに、読後の余韻は深いものがあります。

貧しさから高利貸しの老婆を殺してしまった主人公の大学生ラスコーリニコフ、彼を追い詰める判事ポルフィーリイとの対決、ニヒリストのスヴィドリガイロフや娼婦ソーニャとの出会い、ドストエフスキーがこれらを物語る中で、ラスコーリニコフの心理が不安に満ち、恐怖し、そして葛藤していく様子は、読んでいて非常に興味深いものです。

この小説の終わりは、こんな言葉で締めくくられています。

「しかしそこにはもう新しいものがたりがはじまっている。一人の人間がしだいに更正していくものがたり、その人間がしだいに生れ変わり、一つの世界から他の世界へしだいに移って行き、これまでまったく知らなかった新しい現実を知るものがたりである。これは新しい作品のテーマになり得るであろうが、

このものがたりはこれで終わった。」(上掲書、下巻、485 頁)

読者がこの長い物語を読み終えようとする、まさにそのとき、また新たな物語が始まるということ。それは、ひとつの書物の中に書いてあることがそこで終わり、今度はその書物から得たものを自分自身に反映して行くということの暗示であると、僕は思います。

(文責・南雲 泰輔)

# 「ことば」 担当 山下太郎

昨日の「ことば」のクラス（小1）の記録です。

子どもたちは息せき切って山の上に向かってきます。話したいことが山ほどあるので、最初の5分間はおしゃべりタイムとし、手を挙げて順番にこの一週間に経験したことで、クラスみんなに伝えたいことを話してもらいます。

次に俳句の復習をします。先週習った俳句を紙に何度も書いてきてもらいます。今はひらがなだけで書けるようにしています。中には漢字を書きたがる子もいますが、それはそれでよしとしています。

毎回新しい俳句を一首加えていきます。今回は一茶の「今日からは日本の雁ぞ楽に寝よ」を扱いました。この新しい俳句を全員で復唱して、覚えた段階で白い紙に書き写します。覚えるのはさすがに早いです。ただ、紙に書く字はよく注意しないとよく間違えます。間違っただけで直すことで勉強になります。

残りの時間は、絵本や紙芝居を読みます。今回は、先週半分まで読んだ『てぶくろをかいに』（新美南吉作）の続きです。子どもたちは内容をよく覚えていました。

大人のきつねが村人にひどいめにあわされそうになった絵を見て、このきつねは誰だったかな？ と尋ねると、一人を除き、全員が「おかあさんぎつね」と答えましたが、その一人の生徒は「おかあさんぎつねのお友だち」と正解を答えました。

子どもたちは、次のページにどんなことが書いてあるかをわくわくしながら聞いてくれます。なかなか楽しいひとときです。

もし帽子屋のおじいさんの代わりに自分が店番をしていて、そこへ子狐が手袋を買いに訪れたら？ ということを皆で考えました。

「子狐がかわいいので自分のペットにしたい」という意見が大半でした。「でもそれはかわいそうだ、おかあさんが待っているから」というのが最終的な、みんなの意見になりました。

子どもたちにとって、次の場面が一番心に残ったようでした。

「かあさんぎつねは、しんぱいしながら、ぼうやのきつねのかえってくるのを、いまかいまかと、ふるえながらまっていたので、ぼうやがくると、あたたかいむねにだきしめて、なきたいほどよろこびました。」

最後にMちゃんは、もしお父さん、お母さんぎつねがいないのなら、人間がその子狐をひきとって育ててもいいのではないかと発言をしたのにはなるほどと感心しました。

授業が終わるとあたりは暗くなっていました。帰りの山の石段をおりながら、ちょうど子狐が街明かりをぼんやりきれいだなと眺めたように、しばらくみなで市内の夜景を眺めました。

Tちゃんは山の下で待っていたお母さんに飛びついて甘えていたので、読んだ本の影響かなと私は思いましたが、お母さんは少し驚いておられました。

来週も、楽しい絵本を探してみたいと思います。

（山下 太郎）

# 「ことば」「日本語の読み書き」

担当 南雲泰輔

## 「継続は力なり」

秋学期の火曜日ことばクラスの様子です。

小学生・中学生クラスでは、春学期から引き続きテキストを読解しながら、秋学期からは新たに漢字の学習を並行して行っています。漢字の学習は漢字検定のテキストを使用していますが（どちらのクラスも4級（小学校修了程度）向けを使用）、その問題集の中には、読み書きだけではなく、部首や熟語の構成、類義語や対義語についての問題もあります。使用可能な語彙を増やすという意味でも、漢字の学習は国語力の基礎として外すことが出来ませんが、ただその漢字を覚えるだけでなく、それがどのような要素から構成されているのかを楽しみながら学習していけたらいいと思っています。今のところ「うーん、わからん」「全然できひん」といった感想が多いのですが、漢字の学習は継続して取り組むことで必ず結果を出すことの出来る種類のものでありますから、繰り返し書いたり読んだりして記憶に定着させることが出来れば大丈夫です。

高校生クラスでは、春学期のテキストである三木清著『人生論ノート』（新潮文庫）をひとまず終えて、秋学期からはヤスパース著、草薙正夫訳『哲学入門』（新潮文庫）に移行しました。内容を要約する作業と、その内容に関して自分自身で問題設定をして小論文を作成する作業を行っています。これまでの高校生クラスでは、講師である私が問題を設定し、それについて互いが論作文をし、批評しあうというスタイルでした。今度は、その問題設定も生徒が自分で行うわけです。これはどういうことかというところ、読んだ文章について、ただ読むだけではなく、自分なりの解釈を織り交ぜ、そこからどのような内容が読み取れるか、また発展的に理解することが出来るかを、筋道立てて文章化する訓練をするということです。

ヤスパースは、この書物の中の冒頭の一節で次のように述べます。

「また哲学的思惟には、科学のように、進歩発達の過程という性格がないのであります。確かに、私たちはギリシア時代の医者であったヒッポクラテースよりもはるかに進歩しています。しかし私たちはプラトーンよりも進歩しているとはいえないのです。私たちは、プラトーンに利用できた科学的知識の材料に関してだけなら、彼よりも進歩しているといえる。しかし「哲学すること」それ自身に関してだけなら、おそらく私たちはもう一度彼の水準に到達することはほとんどできないのではないのでしょうか。」

これは、科学的な意味での「進歩」では理解することの出来ない哲学の性質を良く示している文章だと思えます。しかし、だからといって哲学が停滞しているものだというわけでもないのです。一部の人たちの独占物としての科学的知識の増加（「進歩」）ではなく、あらゆる人たちにとって普遍的に存在する「哲学すること＝思考すること＝考えること」の価値は、それが古いか新しいかというだけでは判断出来ないことでしょう。

授業では、いつも、悩み考える過程を大切にしています。すぐに答えの出るものではない問題に取り組むからこそ、確かな力を涵養することになるのです。

（南雲 泰輔）

# 「かず」 担当 福西亮馬

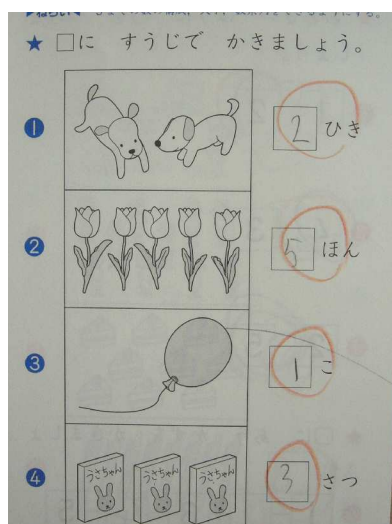
かずのクラスでは、それぞれの学年に応じて、数に対する感覚を身に付けることが課題になっています。それぞれの生徒に、その時点での階段があって、「ああ、今はこんなんだなあ」と、昔自分がそこにいた時のことを振り返りながら、なつかしく接しています。

今、幼稚園では、小さなお子さんが親御さんに手を引かれて、石段を登って来る光景が見られます。たまに幼稚園の子どもたちが平気で駆け下りていく姿と混じる瞬間があって、ほほえましいです。あの時、「よいしょ、よいしょ」と後ろから一段ずつ見守っていた心配が、やがては一人で歩けるようになって、解消していることを、私たちは経験的に知っています。

勉強に関しても、中学生に上がった頃から、だんだんと親御さんの手を離れていきます。そしてこちらが勉強を見てあげようとしても、なかなか応じてくれなくなります。裏を返せば、それまでの小学生の6年間で、一緒に勉強を見てあげる必要があるのだと思います。

もし小学生の時に勉強を見てもらうという必要が満たされていたなら、案外、あとは一人で計画を立てて、勉強をしてくれるようになっていきます。それには親に見られるのが嫌という気持ちも含まれるでしょうが、むしろそれまでと同じように時間を割いて見てもらうのは、申し訳ないと思うからです。また自分ひとりでもできると思えるし、勉強に対して、(嫌でも)前みたいにするのが普通と思うようになってくるからです。

そのように予想を立てながら、私は今の小学生たちの勉強を見ています。勉強のことで、一緒に登ってあげることが、やがてはそれを一人で登れることの応援につながっているのだらうと信じています。



さて、1年生は本当に純粋な時期で、「引き算ができるようになった」「線り上がりができるようになった」という一つ一つの階段を、まるで幼稚園の延長のようにしています。

この間、春学期から続けていたドリルが、どの生徒も一冊終わり、2冊目にかかっています。その2冊目を軽々とできるようになった自分を発見できるのが、何よりのご褒美です。そうした自信がつくことは大事なことだと感じます。

1年生のドリルの最初の最初のページを見ると、こいぬやチューリップの絵があります。これを見て、「かんちこちんや」と言えるようになった生徒は、これまでの自分と階段とを振り返って見下ろしているのだと思います。

そしてふと思い出した時に、それを登ってきたのが「一人ではない」ことを感じ取れる生徒は、中学生になってからも引き続き、その面影を背にして、勉強に対する姿勢を失わないのだらうと思います。

(福西 亮馬)

## かず初級クラス（1年生）

この間、下村麻紀子先生の代理で授業に入ったとき、M君が「繰り上がり」をできるようになっていることを発見しました！

$$9 + 4 = ?$$

M君 「9に1あげたら、いいんやんな？」

先生 「そう、そしたら4にはかわいそうやけど、  
1つあげてしもうたから、3になったなあ」

M君 「...13！」

先生 「正解。じゃあ、次の...7 + 5は？」

このやり取りがすべてです。「鉄は熱いうちに」といいますが、子どもは大人が想像する以上に、単純作業でもいといません。ついつい、大人は今の自分のイメージで手加減したり、「ここはやらなくてもいいよ」と言ってしまうがちですが、小学生は単純に、できなかったことが「できる」ということでうれしかったりします。ひらがなや、九九はその典型で、それをめずらしいと感じるところに付き合ってあげることを心がけようと思います。

## かず中級クラス（2,3年生）

あめが95こありました。68こくいしんぼうのクイクんにあげました。（のこりはなんこでしょう？）

いちごが95こおいていました。くいしんぼうのクイクんが68こいっきにたべました。のこりはなんこでしょう。

これは、2年生のK君がドリルにある設問で、「95 - 68をするための問題を自分で作りなさい」に対して作った問題です。「くいしんぼう」とか「いっきに」というアドリブは何気ないようですが、おそらくK君の心の中では、68こ食べるのが不自然に思えたために挿入された言葉なのでしょう。よく考えてくれたと思います。

話は変わりますが、3年生のT君も、問題を作ることが得意です。それを先生に出すのも好きです。そこに「生徒」と「先生」が入れ替われる喜びがあるからなのでしょう。問題を作れる人は、きっと将来その科目が好きになっても、嫌いにはならないのだと思います。

## かず上級クラス（5,6年生）



5,6年生にもなると、さすがに「勉強をしに来ている」という意識が見られます。

そんな中で、5年生のHちゃんは、今学期の2回目から参加され、ドキドキしている最初の授業中にドリルを20ページ、そして来週までに宿題で26ページもしてきてくれる、という記録的ながんばりを見せてくれました（ドリルは4年生のものをしています）。

私が褒めたいのは、たくさんやったからという以上に、それが自分から率先してやった「結果」だったからです。言われた以上のことをしてきてくれ、本当に感心しました。私もいつか、歴史のレポートで分厚く調べてきたことを、一番上のもう一つ上で評価してもらったことが嬉しかったのを覚えています。ですからHちゃんのようなモチベーションを、これからも大事にしていきたいと思います。

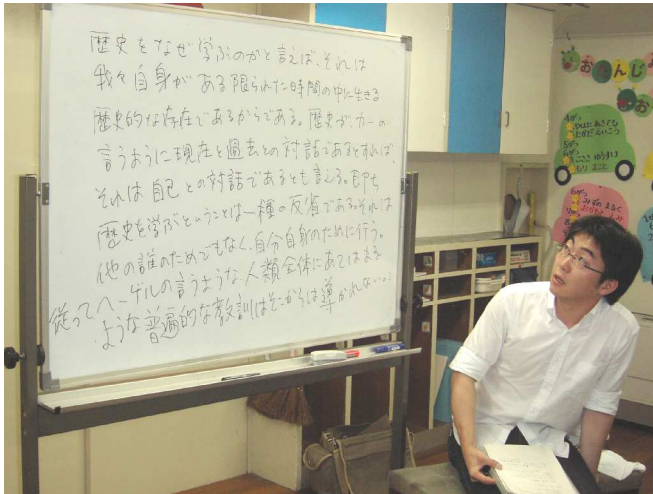
（文責・福西 亮馬）

# 青春ライブ・レビュー

第15回目(2005年7月15日)  
 題名:『なんで歴史を学ぶか』

なくもたいすけ  
 講師:南雲泰輔

(山の学校講師・京都大学4回生)



はじめに、歴史を学ぼうとする動機付けにどのようなタイプがあるのか、簡単に紹介がありました。

続いて本題の「なぜ歴史を学ぶか?」という問題について、参加者に自分の意見を書くように求められました。制限時間は15分。私もひさびさに試験を受けるような気分で、隣に座っていた中学生に負けじと鉛筆を動かしていたのですが、まともな文章にならず、キーワードを並べて思案している内に時間切れとなりました。

南雲先生の「ことば」のクラスは、小学生も高校生もいつもこのスタイル(=先生と生徒があるテーマに即して自分の意見を書き、互いに批評しあう)であり、参加した大人たちより生徒たちのほうが、すらすら筆が運んでいたかもしれません。

その後、中学生から順に、自分の書いた文章を皆の前で発表していきました。どの生徒のどの文章も「なるほど、そういう見方もあるな」と思うものばかりでした。

中学生、高校生の次は、大人の番でした。まず南雲先生が自分の考え(答えではなく)をホワイトボードに書かれました。うーむ、なるほど!という内容。

続いて座っている順に大人たちが自分の意見を披露していきました。これまた大人には大人の穿った見方、幅広い見方があるんだということがわかって、そのいずれもが傾聴に値するものばかりでした。

今回は大人も子どもも、親も子も、先生も生徒も、年齢も立場も関係なく、文字通り、参加者が一人間として自分の考えを述べていくスタイルであり、その結果、誰のどの意見が正解と言うことはなく、ただ、人それぞれに自分の意見があることが確認できました。

その意味で遠くギリシアのアゴラや、ローマのフォルムで交わされた「対話」の醍醐味を味わうことが出来た点で、たいへん意義深いライブ授業だったと思います。

(文責・山下太郎)

## ライブ後の感想

歴史を学ぶことについてこれほど深く考えたことはありませんでした。

青春ライブ授業は毎回深い内容で(一見簡単に見えること)考える力がつきます。他の人の色んな考えを聞いて勉強になります。

歴史を学ぶとは何か、定義することはできないけれど、考えながら世界史を学ぶと楽しく学べると思いました。

南雲先生のように、たくさんの本を読んで、自分の考えを自信を持って人に話せるようになりたいです。だから小説ばかりでなく少し難しい(たとえば哲学の本とか)を読んだりしていきたいです。

(高校2年生)

『歴史』は今まですべての人々が発見、理解、創成した事実の集大成だと僕は思う。

『歴史』は役に立つけれども、それは『常に』ではなく歴史は移り変わるし、また一人一人の思想や感情にも役に立つかどうかは変化する。歴史が自分自身の役に立つかどうかはその人の目的によるから結局のところ誰にもその答えは見つからないし、答え自体があるかどうかも分からない。

仮に誰かが見つけたのならそれは正しくないか、すべての事象が終末を迎えた後であると僕は思う。

(高校2年生)

次回の青春ライブ!は...

10月28日(金)

『あれもこれも学んでみたい!』  
 ~知のネットワーク化~  
 (講師:前川裕)です。



# 『少年、追いやすく(夢を)』

9月の山びこクラブ「とべ!かみひこうき」より

文章 / 山びこ小僧



基本形は6種類。そこから翼を曲げたり平らにしたりで、たちまち種類が増えます



いざ、発進! (一番ワクワクする瞬間)



さあ、フライトだ!



「ジャングルジムから投げたら、もっと飛ぶかな...」(まるで昔の自分のような)

「かみひこうき」というと、お手軽に遊べそうなイメージがありますね。でも私の場合、実際、「よし」と思ってやってみても、なかなかうまく飛ばなかったなあ...という記憶の方がほとんどだったりもします。

紙が弱すぎたり、左右がゆがんでいたり、おもりがなかったり...と、いろいろ原因はあると思いますが、当時私の小学生の知恵では解決できず、「ちえっ、おかしいな...」と、心の中で悶々としていました...

今回はそのリベンジのつもりで、いろいろ研究してみました。「なるほど、こうしたら飛ぶのか...」という理由がわかったときには、ほんの少し時を取り戻せたような気になりました。

けれども「山びこ」の前日に、幼稚園の庭でひとり、試作機の実験をしていると、だんだんと風がさみしくなってきました。飛んでも飛ばなくても、誰も見ていないので、(なんだか、1番でもべったこでも同じようだなあ...)と、ふとよぎったのでした。

さて当日になり、子どもたちを見ていると、強く思ったことがありました。それは「グループ」という物でした。

「飛ぶ・飛ばない」の持つ意味は、グループと一人とでは、違いがあるようです。ひこうきが飛ぶ事実だけでなく、そのひこうきを「持っている自分」を、仲間に周知されるからです。「仲間」に1番だと思われる存在が、自分だと知ると得意になります。功名心のある子は、自分が2番だと(周知されることに)がっかりします。一人でするときと違って、1番はやっぱり1番のようです。

「山びこ」で最後にコンテストをしたとき、3年生の男の子が、まっすぐ飛ぶひこうきを持っていました。自分で作り方をアレンジして、2回折る翼を3回折って、矢のようにスリムにしたひこうきでした。実際よく飛んで、彼はそれがとても自慢そうでした。

私は面白いな、と思いました。その男の子が3年生で、場の中では年上の方だったから、なおさらです。この頃はまだ1年生に混じってでも、ひこうきを飛ばして「喜べる」んだなと。きっと彼がその中で1番「かみひこうき名人」だった経験は、ずっと後になってからでも自信となって蘇ってくるのだろうと感じました。

世の中に出てみると、「どうして、お前、そんなに自信あるんや?」と質問したくなるような人がいますが、そういう人はきっと、ドッジボールが強かったり、何かクラスで話題をさらうような遊びが得意だったに違いありません。

遊びはそういった「強くなる」思い出の宝庫です。部屋の中の方が好きな子(実際私がそうでしたが)でも、運動場や公園といった、何人も日替わりでメンバーが集うような場で、たくさん遊んでほしいと思います。



